

ていた学生（以下 B 群）は24名（31.6％）であった。看護学科への進路決定と、学習を中心とした学校適応について、2群を比較した。

1. 看護学科の受験決定時期には有意差（ $p < 0.01$ ）がみられ、A 群は B 群より早期に進路を決定していた。
2. 進学意志決定は、A 群は B 群より自己決定が高率であり、志望順位と自己決定・他者決定は関連する傾向を示した。
3. 入学動機は、A 群では「やりがいのある仕事」（ $p < 0.05$ ）「あこがれ」（ $p < 0.01$ ）が B 群よりも有意に高得点であり、B 群では「大学に進学できなかったから」（ $p < 0.01$ ）が A 群よりも有意に高得点であった。
4. 学習意欲等については、A 群は「看護学科を選んで良かったと思う」が有意（ $p < 0.01$ ）に高く、B 群は「何となく欠席してしまう」が高得点の傾向を示した。
5. 将来の希望職種は、A 群では「未決定」が9名（17.3％）、B 群では11名（45.8％）であり、将来の志望職種の決定時期は志望順位と有意（ $p < 0.01$ ）な関連があった。
6. 中途退学を考えたことのある学生は、A 群10名（21.2％）に対し B 群では12名（50％）で、志望順位と有意（ $p < 0.05$ ）な関連があった。

今回の調査の結果、入学後の適応には進路選択時の志望の強さと入学動機が関連していた。進路選択時に志望順位の低い学生は、学業継続について悩んでおり、将来の専門職への就職も躊躇していた。今後縦断調査を行うことで、学習への動機づけや学習意欲に関連する要因を更に追究することが重要であると考ええる。

3. 自己表現を促した作業活動と治療環境

腰原 菊恵

（作業療法学科）

作業療法の特徴の一つとして、作業活動を働かかけの補助として利用し、援助治療関係を結

ぶということがある。今回その特徴を活かし、精神の問題を持った母親と家庭に対する不安や不満を表現できず、不登校という行動化した11歳の女兒との関わりから、自己表現を促した作業活動の役割とそれを保障した治療環境について検討した。

家庭における症例は、活動性を高めることで母親が反応するため、本来子どもが遊びの中で発散する攻撃性が発散できず、内向的な遊びを行っていた。そこで作業療法では、オセロという一定した対人距離の保てる作業活動を介して作業療法士を観察しながら関わり（対象事物を通して見る関係）、時にバルーン人形等の代理対象を使って攻撃性を表現し始めた。4ヶ月程すると、作業療法士とスポーツをすることで攻撃性の適応的発散を行いながら、作業活動を利用して意思表示をし始めた（対象事物を介した間接的な関係）。作業活動を介した自己表現を受け入れられたことで、症例は次第に今後の不安や父親への不満等の心の内を言語化して訴えるようになった（対象事物を交えた直接的な関係）。

作業活動を行うことは、押さえていた感情を罪悪感を感じず自然に表現できる役割を果たすと考えられる。その治療環境として、対象者がどんな行動をしても常に変わらない空間、場、時間、作業療法士の対応が必要であり、その環境が対象者にとって信頼できる場の提供になると考えられる。また、治療者が症例の思い通りになる時間と空間を保障したことで、治療者はウィニコットのいう「ほどよい母親」の役割をし、対象者の自我を支えたと考えられ、常に変わらない作業療法士の対応が対象者の対象恒常性の発達を促し、安心して内的感情を表現できることになったと考えられる。